東京学芸
026

〔E類表現教育コース　対象〕　　前　期

令和7年度
一般選抜前期日程
私費外国人
帰国生

小　論　文

次の文章を読んで，後の問いに答えよ。

「美しい」と感じるのは主観です。その主観があてになるかどうかは別として，まず「美しい」と感じるのは主観です。その主観があるにもかかわらず，どうして「美しい」に関する判断基準は，「自分の外側」なんてところに存在してしまうのでしょうか？この謎を解いてみましょう。

まず，美術品とか宝飾品という「価値の高い物」を頭に思い浮かべて下さい。この値段は，誰が決めるのでしょう？　あなたではありません。あなたの外側で，その値段は決められます。

あなたがその「買い手」であるとして，あなたにその値段は決められません。「売り手」が決めます。あなたが「売り手」であるとしても，その値段はあなたが決められません。買い手が「うん」と言わなければ，その価格設定は成り立ちません。あなたが売り手であろうと買い手であろうと，その値段は，相手が「うん」と言わない限り，値段として成り立ちません。つまり，値打ちとは「自分の外側」で決まるものなのです。

「“美しい”を論じるのに値段を持ち出すとは何事」と仰言(おっしゃ)る人もおありかもしれませんが，美術品や宝飾品が「高価なもの」であることは事実です。「ただのもの」「なんのへんてつもないもの」と思われていたものに高い値段がついてしまったら，それはその瞬間から「美術品」にもなってしまいます。「美しいものが好きだけど悪趣味な人」というのは，「審美眼がない」以前に，「美しいもの＝価値の高いもの」という錯覚をしていることが多いのです。

「美しいから価値が高い」は，たやすく「価値が高いから美しい」という錯覚を生みます。「美しいものが好き」と言って悪趣味なだけの人の多くは，ただ単に「価値の高いもの」「“価値が高い”と言われるもの」が好きなだけなのです。だからこそ，「本物とは似ても似つかない贋物(にせもの)」を大切に崇めてしまうのです。それくらい，美術品や宝飾品は価値が高いのですが，では，その「価値の高さ」はどこから生まれるのでしょう？それは，「美術品や宝飾品はなぜ値段が高いのか？」を考えれば分かります。

なぜ値段が高いのか？　誰かがその値段を高くしたのか？　違います。美術品や宝飾品は，そもそも値段が高いのです。だから値段が下げられないのです。

では，そもそもの値段が高いのはなぜでしょう？　その製作原価が高いからです。

普通はそんな風に考えませんが，よく考えればそうです。

それでは，なぜ美術品や宝飾品の製作原価は高いのでしょう？　金や銀や宝石という，値段の高いものがふんだんに使われているからだけではありません。ここには，「完成までの期間レオナルド・ダ・ヴィンチを丸抱えにする」というような，質的にとんでもない経費も含まれているからです。そしてもちろん，レオナルド・ダ・ヴィンチのギャラがとんでもなく高いのは，彼が一流の芸術家だからではありません。そもそも，「美術品は高価であってもいい」という前提があればこそ，その製作に関わる芸術家のギャランティは高くなる――つまり，美術品とはそもそもの製作原価が高いものなのです。

それでは，なぜ「美術品は高価であってもいい」などという前提が生まれたのでしょうか？　それは，美術品や宝飾品のそもそもが，「値段は高くてもかまわない。自分の勢威を誇示するためなら，高ければ高いほどいい」と言う，王侯貴族のために作られたものだからです。

美術史の本をちょっとでも紐とけば分かります。古い時代の美術品は，みんな王侯貴族のような特別の人のために作られたものなのです。普通の人間の生活のためのものなら，美術館には行かず，歴史のあり方を展示する博物館に行きます。「普通のもの」をグレード・アップさせて「美術品」とするためには，普通ならざる財力を必要とします。それあってこその「美術品」なのです。

たとえば，特別に高価な材料を使っているとは思えない「素焼の人形」である埴輪（はにわ）です。埴輪一つを作るのにたいした経費がかかるとも思えませんが，埴輪は，古代の権力者の副葬品です。これを作ることは，巨大な古墳を作ることとセットになっています。巨大な古墳を作る財力がなかったら，素焼の埴輪一つでさえ作れないのです。

美術品や宝飾品は，そもそも普通の生活には必要のないものです。それを「必要だ」と言えるのは，特別な力を持った者だけで，だからこそ，美術品や宝飾品は「王侯貴族のもの」としてスタートします。それを基準にして，その時代その時代の特別な力を持った裕福な人間達のために，美術品というのは作られるのです。「美しいのは特別なものではない。生活の中から生み出されたものは，それ自体が固有な美しさを持っている」という思想が生まれるのは，二十世紀になってからのことなのです。つまり，「美しいもの＝美術品」を追い求めるのは，前の時代に権力を持っていた人間

達の「特別」を追い求めるのとおんなじだということです。その前提があるから，「美しいもの＝美術品」は価値が高いのです――そういう側面だってあるのです。

つまり，「美しいものを追い求める」には，「失われた過去の時代の特権を求める」という側面もあるのだということです。その点で，「美しい」は制度です。「なにが美しいかは決まっている」とか，「美しいものは価値が高いに決まっている」というのには，「王様や貴族は，王様や貴族だからえらいに決まっている」というのと同じ側面だってあるのです。

「美しい」には，そういう危険な側面もあります。だから（略）私は，美術品を見る時，「美しい」という基準を一時的に棚上げにします。その代わりに，「カッコいいかどうか」という，主観によって判断します。

それが「カッコいい」と思えれば，それは「美しい」のです。（略）私はその直感によって，「その美術品の美しさ，その時代の美意識のありよう」を考えるようにしています。（橋本治『人はなぜ「美しい」がわかるのか』ちくま新書，2002年）

問1　筆者の考えを要約せよ。

問2　あなたがこれまでに鑑賞したり関わったりした芸術作品や活動について，「『美しい』に関する判断基準」が自身の外側にもあり得た例を一つ挙げ，その作品や活動がどのようなものか説明しなさい。その上で，自身の主観的な判断のあり方と，自身の外側にあった「美しい」に関する判断基準の違いについて，筆者の考えを参照しながら述べなさい。

字数は600字以上800字以内（句読点を含む）とする。